大宮アルディージャ
トータルアドバイザー

清雲栄純氏

　1994年〜1997年ジェフ市原監督、チーム統括部長を経て、1997年〜1998年日本サッカー協会の強化副部長としてU―18、U―19日本代表監督も務めさせていただきました。その期限終了直前に大宮アルディージャからゼネラルマネージャーのオファーがありました。

　JFL時代のチームは知っていましたが、J2参入が決まったばかりの大宮アルディージャについては、最初は清水隆氏、その後佐久間悟氏、中村維夫氏（現ドコモ相談役）と話し合いをさせていただく中で理解していくようになりました。ジェフ市原時代以前の日本代表コーチ（オフト監督）や、サッカー協会での人脈が大変役に立ったと思います。また、1試合だけでは強化部長だった佐々木則夫氏とも話をしました。

　3月の開幕戦目前の1999年1月1日、着任当初は何もないところからのスタートでした。チームの一体感の象徴である練習着も揃っておらず、クラブの体をなしていない状態でした。ピッチにしても、使えると思っていた志木グラウンドは芝の養生中だったため、練習場に片道2時間もの移動をして行ったこともあります。余談ですが、河川敷だったグラウンドがやっと使用できるようになった時、台風で冠水してしまったこともありました。また、スタッフが少ないため選手のスカウトは後回しでピッチ探しや行政や地元サッカー関係者との打ち合わせなどに時間を費やすことが多々ありました。そんな中、ピム監督自らJ1や大学・高校等の練習試合を熱心にスカウティングして選手をチェックできたことはよかったです。チームに少し余裕が生まれた時はJリーグが目標にしているヨーロッパの総合型地域スポーツクラブを大宮に根付かせたいという理想のもと、大宮アルディージャを知っていただくために地元の会合にも顔を出すようにしました。

　戦略的には、ピム監督の描くオランダサッカーのベースであるイニシアチブのとれるサッカー目指し、3年計画でJ1昇格を目標に掲げました。

　2001年のバルデス選手の活躍で7月の段階で2位に9ポイント差をつけ、昇格への期待が高まりましたが、そのバルデス選手がワールドカップの中南米予選のパナマ代表で骨折して長期離脱で順位を下げてしまい、海外選手獲得の難しさを経験したことを思い出します。このように厳しいチーム状況でも一筋の光も見えました。C契約（育成枠）のバレー選手の活躍です。パワーやスピード、倒れるまで練習するなど献身的な頑張りはすばらしいものがありました。

　その後3シーズンかかりましたが強化部長の佐久間氏、育成・普及部長の佐々木氏とともに日本人を中心にしたアクション・サッカーでチーム作りを継続した結果昇格を果たすことができました。参入後6年での昇格が遅かったか早かったかは周囲が決めることだと思います。

　Jリーグ全体を見ても、発足から13年、経済的には厳しい状況で常にリスクを負う環境（大宮の場合は本来のトレーニングセンターがない）の中でも、アルディージャは決して悪い状況ではなかったと思います。

　日本のJリーグは、ヨーロッパサッカーの歴史に比べてまだたったの20年、まだまだこれからです。ただ最大のウイークポイントはハード面だと思います。育成の練習環境は、ジプシー状態で負担が大きく不安定です。サッカーだけが突出するのではなく、学校・家庭・地域で子供達のスポーツをサポートできる体制が必要です。クラブが地域とともに成長するためには、保護者・行政・地元の企業（法人）等の理解が必要です。

　クラブも〝子供達のためにアルディージャがやっていることに賛同しよう〟という支える人の環境をいかに充実させるかがこれからの課題でしょう。勝ち負けだけを追いかけるのではなく、地域と連携して一歩一歩上っていくことです。新クラブハウスの完成は新たなきっかけになるでしょう。自前で選手育成しながら強化することができるようになることもアルディージャ・ファミリーを増やすことになります。クラブスタッフが連帯して、地元で支えてくれている人達やボランティアの皆さんに感謝し、昨年3月の震災後日本が世界から賞賛を浴びた「絆」や「利他心」（自分の利益より他人を思いやる心）を持たなければなりません。子供達に感動や夢を与え、高齢者の生きがい作りのために他のスポーツ・文化団体とも連動して地域にフィードバックすることが大切です。また、選手のセカンドキャリアについても、行政や地域の企業と連携して進めていくことが求められていると思います。

　アルディージャはJ1参戦8年目を迎えます。今年はチームの成績で恩返しするシーズンにクラブ一丸で闘いますのでこれまで同様、後援会の皆様にはサポートしていただけると嬉しいです。

特集 インタビュー
岡本隆吾氏 × 斉藤雅人氏

Q1　NTT関東サッカー部を選んだのは？

岡本　Jリーグでサッカーをやりたいという希望はありましたが、どのレベルなら自分の力を発揮できるかを考えた時、プロの道より社会人としてサッカーを続ける道を選択しました。NTT関東は、当時はまだJFLでしたがレベルは高く、入社前に練習に参加したのはまさにチャレンジでした。関東圏内でやっていきたい思いが強かったこともあり、清水監督や佐々木コーチに相談して、このチームに入りたいという気持ちが固まり入社を決めました。

斉藤　JFL最後の年に佐久間コーチからの誘いを受けて、2年後にはJリーグ参入がほぼ確実でしたので、迷うことなく入社を決めました。家族や多くの友人のいる地元さいたまで、常に応援・支援をもらいながらサッカーをやることは自然の成り行きでしたし、それらに応えるためにも地元で頑張りたかったからです。

Q2　プロ契約に対する考え方は？

岡本　仕事とサッカーの両立を選択し、プロ契約はしませんでしたが、JFLリーグで、チャレンジする気持ちを強く持っていました。

斉藤　サッカーをすることに変わりはないので、プロ契約をするかしないかは、正直特に重要ではありませんでした。大切なのはピッチで自分を最大限に表現し試合で結果を出すことであり、ポジションをとることだと思います。契約は、社員でもプロでも1年。ただ、プロには勝利給があるので、プロ契約した選手からは「どうして（プロ契約）しないのか？」とはよく聞かれました。また、プロ契約した後輩から驕られることもしばしばありました。家族からは逆に、社員でいることを歓迎されていました。

岡本隆吾氏
大宮アルディージャ
育成フィジカルコーチ

Q3　J2時代苦労したことは？

岡本　練習場を転々としたことです。その場合、自家用車での移動でした。また、よくグラウンドが水没したことです。練習ができないばかりか、用具の移動等が大変でした。苦労というより良い経験でした。

斉藤　練習場の問題の他に、当初新幹線での移動は普通車指定席でした。その後専用バスになり、状況は少しずつ改善されました。今だから苦労と言えますが、当時は辛いとは思っていませんでした。

Q4　さいたま市にJリーグクラブが2チームあることでの競争意識は？

岡本　地域密着で地道に背伸びをせずに頑張るのみで、どのチームが相手でも、キャプテンとしてチームをコントロールし、精一杯戦いました。特に競争意識は持っていませんでした。

斉藤　「ダービー」という意識よりも、純粋に「勝ちたい」という気持ちだけでした。モチベーションを高くして試合に臨むように心がけました。

Q5　現役時代印象に残っているゲームや出来事は？

岡本　目の前で相手チームの昇格（JFLからJ2に）に立ち会った試合です。ユニバースタジアムでの神戸との試合では、ラウドルップ選手や永島選手のプレーが印象に残っています。また、札幌にも同様に決められています。大変悔しい思いをしましたが、次は自分たちが頑張ろうという目標を強く持てたことは良かったです。引退した次の年でしたが、J1昇格を決めた試合も本当に嬉しかったです。

斉藤　J1昇格を決めた2004年11月20日の水戸戦とJ1昇格後、アウエイガンバ大阪戦で勝利した（2―0）試合です。

Q6　現役引退の理由と現在の目標は？

岡本　体力的に限界を感じたことと〝教師になりたい〟、〝子供たちの指導をすることで自分も一緒に成長したい〟という気持ちが強くなったためです。

　サッカーの底辺である子供たちを指導することで、もっとサッカーを広め仲間を増やし、そこからステップアップして中学・高校生の指導ができるようになり、教え子の中からプロ選手が生まれることです。自分の選手としての経験も大事ですが、コーチとしていろいろな選手を指導する体験、試行錯誤することがより大切です。高校の恩師やピム監督は、選手に考えさせる指導法でした。もちろんルール等しっかり教えなければならない場面もありますが、選手自身が考えることは、可能性を引き上げることになります。

斉藤　まだまだやっていける自信はありましたが、クラブから来年はないと宣告されたため引退を決めました。チームのために何ができるかを考えて、指導者としてチームに貢献することを選びました。ジュニアユースの子供達には、フィジカルを鍛えるために食事に一番気を使っています。サッカー好きな子供を増やしていきたいです。

斉藤雅人氏
大宮アルディージャ
ジュニアユースコーチ

Q7　これから大宮アルディージャに期待することは？

岡本　このままステップアップしていってほしいです。ジュニアユース・ユースからトップチームへと指導ポイントの流れが続いているので、このまま続けていって少しずつ結果を出すことです。

斉藤　地域ぐるみで、サッカーを楽しむ機会をつくり、地域に密着したチームになっていってほしいです。

※敬称は略させていただきました

プロフィール

岡本隆吾
横浜市立南高→日大を経て1996年～2003年まで大宮アルディージャのDFとして活躍。神奈川県横浜市出身。

斉藤雅人
尾間木少年サッカー少年団→武南高校→駒澤大を経て1998年～2009年まで大宮アルディージャのMFとして活躍。埼玉県さいたま市（旧浦和市）出身。

ORANGER代表

大野孝之氏

　ワールドカップを日本に呼ぶ事の「悔しさ」に疲れが出始めていた頃、この出会いがありました。ゲーム中、選手の同僚や家族の方が弁当を芝生に広げながら、たまにボンボンを振り、子供の運動会を応援に来たようなスタンドの空気。

　サッカーに対して疲れと苦痛、権力に対しての憎しみを感じていた僕にとって、あののどかな光景は衝撃でした。それは日本サッカーの原点とは何か？を僕に思い起こさせた、強烈な90分でした。観客1000人程度の競技場で走り回るサッカー好きの社会人達に心吸い込まれる事になった瞬間。Jリーグブーム真っ只中の95年8月の川越。0－1の敗戦。相手の東京ガスには少人数ながら立派すぎるサポーターがついていた。

　前年、たまたま同じ川越で見ていた柏のJ昇格ゲームの相手になってしまった、運の無いクラブという認識でしかなかった。サッカーをブームで終わらせたくなかった僕は、このクラブでフットボールの文化を埼玉に定着させる決心をしました。ゲーム後「お前らに1万人の前で試合させてやるからな」という僕の決意表明に、清水監督（※1）のなんともいえない、苦笑混じりに遠慮された表情が、僕にさらに火をつけました。

　翌月の9月の初め、京都サンガ戦。僕と友人の2人で太鼓と布切れを持ち込んだ鴻巣の芝生席から全てが始まりました。「お前らを日本のトップリーグと世界で勝たせっから。じゃいくぞ。受け止めろ。」何事も気持ちと自信が無ければ成功しない。根拠の無い自信で宣言し、後に引けない状況を作り、Nカン（※2）の背中を勝手に押し始める。「こいつらに夢を見さしてもらおう」。

　最初はブームに乗った面白半分の兄ちゃん達と見られていてクラブも選手も半信半疑。クラブの人がわかり易いように、また子供達が食いつきやすいように、あえて応援戦隊オレンジャーなんて名前を名乗りました。

　選手達にも「スーパー社員オレンジ軍団」とあだ名を付けテーマ曲を作りました。表面的にはふざけすぎです。

　96年開幕戦のアウェイ・都田サッカー場で僕らを見つけ、やっと信じてもらえました。社員でもない変な2人組がいきなり自分達本位の応援を始めても受け入れてもらえるワケがない。そこでNTT割引コールというのを作り、それが最初の応援歌となりました。「割引だったらテレチョイス！テレジョーズ！テレワイズ！」と、各地でNTTの宣伝をしてからゲームに入るというウケを狙ったりしました。第三者に応援されるというお節介に戸惑っていた社員選手達には、強引にリクエストを取って一人ひとり応援歌を作り、なるべく距離を近く保つようにしました。

　選手の特徴を拾い上げて全員をスター選手のように扱い、大型新人の岡本選手には異常なまでの愛情表現をし、なりふり構わずチヤホヤしました。イチ社員選手ではあるけれど日曜午後の90分だけはJリーガーでいてもらいたかった。

　96年末、僕らだけの為にファン感謝デーをやってもらいました。志木グラウンドでJSLクラブがビシッとリーグ同様アウェイユニホームに身を包み、僕ら素人4チームとトーナメント試合を組んでくれ、寮の見学、おにぎりと豚汁、選手から強制的にサイン付グッズが渡される等大盤振る舞いでした。この日の為にサインを考えた社員選手もいたようです。まさにクラブの感謝を形で返してもらい、クラブとファンの関係が確立した瞬間でした。

　現地応援以外にやるべき事は限りなく、まずはファン集めに動く日々でした。クラブの方に無理を言い、招待券を束で戴いて東武各線、京浜東北線駅前の店舗に手製のビラと一緒に配り歩いたり、時には南銀で呼び込みのお兄さんを勧誘したりもしました。ネックなのはサッカーに興味のある少年とその家族の方々は自分がサッカーをやってる日、時間がゲームと被ること。他にも決定的に足を運んでもらえる層というのを見つけるのはなかなか難しい。インターネットが普及する直前でスタンド外の武器はアナログな紙ビラと署名活動。1枚の招待券やビラが、本人どころか家族や友人を連れて来るかも。この小学生が将来Nカンの選手になるかも。

　近隣世帯から応援が雑音に聞こえるからやめろ等の苦情も多かったですが、地道ながら夢膨らむ時期でした。

　当時知っていたマスコミ関係の方にも露出してもらうように働きかけ続けても、自ら3000人と定めた観客を呼び込む目標はとてつもなく高い壁でした。

　最大の問題は企業の部活動の一環でしかなく、Jを目指すどころか、都市対抗野球で好成績を残すNTT関東野球部には社内的に勝てない事でした。

（次号へつづく）

※1　清水監督…清水隆氏（第9代NTT関東サッカー部監督）
※2　Nカン…NTT関東サッカー部

大宮アルディージャを応援しています
大福神漬の 河村屋
江戸・文化文政期創業
さいたま市北区別所町1125-6
TEL 048(663)0255
HP http://www.kawamuraya.co.jp

LAFORET SHIMIZUEN
ご婚礼ご宴会に
大宮 ラフォーレ 清水園
埼玉県さいたま市大宮区東町2-204
大宮氷川大社参道
TEL.048-643-1234　FAX.048-645-4321
http://www.shimizuen.co.jp/

大宮アルディージャを
応援します！
㈱渡辺塗装工業
さいたま市大宮区天沼町1-452
TEL048-648-4111
http://www.watanabe-tosou.co.jp

土木建築基礎材料各種
改良土製造販売
土木・舗装工事
株式会社 オザワ
【本　社】〒330-0846
さいたま市大宮区大門町3-59
☎048-641-4032　FAX 048-644-5517
【営業所】〒330-0834
さいたま市大宮区天沼町2-1258
☎048-641-2150　FAX 048-645-7486

日本オリンピック強化トレーナーを
兼任する安心の治療院
おかげさまで23年
加田指圧治療院
Shiatsu room lealea
アロマの香りが漂う治療院で
あなたの痛みを和らげます。
さいたま市北区盆栽町62
☎048-653-7509

西町運輸倉庫株式会社
〒339-0072　さいたま市岩槻区古ヶ場1-1-2
TEL:048-794-5050　FAX:048-794-8188

三倭観光株式会社
〒339-0073　さいたま市岩槻区上野4-6-15
TEL:048-794-6211　FAX:048-794-1996
http://www.mitsuwa-kanko.co.jp/

株式会社三幸自動車
〒339-0071　さいたま市岩槻区相野原290-1
TEL:048-794-6651　FAX:048-794-6654

※この欄に広告掲載希望の方は、事務局にお問い合わせください。TEL/FAX 048-649-0381（火〜金 10:00〜18:00）E-mail：info@ardija.net　URL：http://www.ardija.net/　モバイルサイト http://www.ardija.net/i/　アルディージャ後援会へのご意見・ご質問もこちらへどうぞ。